

「イスラエル建国史」

25 英委任統治下の パレスチナ 2

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

第一次世界大戦後、シオニズム運動に理解を示すハーバート・サムエル高等弁務官がパレスチナに着任し、ここにユダヤ人のナショナルホーム建設が本格化する。ブランドイスを初めとするアメリカ代表团とワイツマンなどのヨーロッパ勢との対立もあったが、首席ラビの制度化や、後にイスラエル建国の牽引力となる労働総同盟「ヒスタドルート」の設立など、ユダヤ人社会の基盤が次第に整えられていく。しかし、ユダヤ人社会の建設が進むにつれ、アラブ人社会の反発が強まることになる。

アラブの反対とテロ

アラブ社会は過激なハッジ・アミン・フセイニ（後にエルサレム大法官）と比較的穏健なラゲブ・ベイ・ナシヤシビ（エルサレム市長）の率いる派に分かれ、主導権争いで火花を散らしていた。シリアを交えずパレスチナ人としての意志表示をしたのは、1921年に執行委員会代表がロンドンに行った時からである。彼らはバルフォア宣言の撤回と全パレスチナを領土にするアラブ国家の建設を求めた。その一方で1920年からテロを戦術として使い始める。さらに祭日で感情が高ぶっている時、煽動演説で暴徒化した群集は、ユダヤ人地区を襲撃した。



ハッジ・アミン・フセイニ



ラゲブ・ベイ・ナシヤシビ

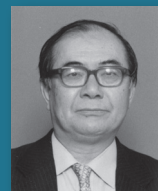
員数であった。復員して家族の許に帰る人、パレスチナのユダヤ人社会の建設に携わる人で、段々と減っていったのである。

英当局は平和時には大部隊の維持は不要という考えであり、ユダヤ人部隊を思い通りに扱えないという判断もあった。

1919年晩夏、第40大隊は隊員80名のエジプト行きを命じられた。同地で発生している暴動鎮圧のためであったが、隊員達はこの命令を拒否した。パレスチナのユダヤ人が英官憲の走狗となり、アラブ世界の弾圧に加担している、とされなくなかったのである。

1921年5月には、ヤッフォで反ユダヤ暴動が発生し、

レホボット、ペタハティクバ、ハデラに飛び火した時、ユディアン連隊として一本化されていた隊は、隊長のマルゴリン大佐が、高等弁務官の許可を待たずに、暴動鎮圧のため出動した。隊は、鎮圧にあたった英軍部隊の一部にすぎないが、ユダヤ人を守るという意志の表明であり、エジプトの暴動とは違うという認識である。ちなみにこの5月の反ユダヤ暴動で、ユダヤ人47名が殺され、140名が負傷した（アラ



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

ブ側は、鎮圧時死亡48名、負傷73名の被害をだした）。

世界シオニスト機構執行部は、消滅の危機にあるユディアン連隊の存続を求めて、英当局に要請書をだしたが、英当局は、ヤッフォ出動の直後、ユディアン連隊を解隊してしまった。

ハガナの誕生

しかし、国家再建をめざす人々が、自衛組織を持つとする意志を棄てたわけではない。話は1年前にさかのぼるが、1920年春、過越祭の時期エルサレムで大きい事件が起きた。

この時期は、キリスト教では復活祭、イスラム教ではネビ・ムーサの祭と重なる。4月4日、ネビ・ムーサの祭礼に集まった数千のムスリムが、煽動演説に興奮して暴徒化し、旧市のユダヤ人地区を襲ったのである。その時、急をきいたユダヤ人青年約200名が、現場へ向かった。青年達はヤッフォ門、ダマスカス門から旧市街へ入ろうとしたが、英軍部隊に阻止され、城壁内に入れなかった。この時の反ユダヤ暴動で、ユダヤ人5名が死亡、負傷者は211名に達し、女性2名が暴行をうけた。

この青年達を組織し、指揮していたのが、ジャボチンスキーで、その組織をハガナ（防衛の意）といった。イスラエル国防軍（IDF）の前身である。この年の3月、ジャボチンス

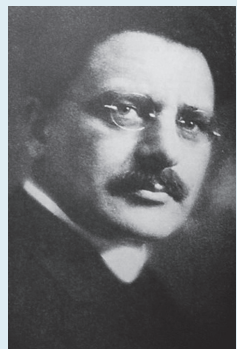


ジャボチンスキー

ユダヤ軍団（ユディアン連隊）の解隊

第一次世界大戦後、第38～40の3個大隊はひとつにまとめられ、ユディアン連隊と隊名を変えた。隊章は、メノラにカディマ（前進）というヘブライ文字を配したデザインである。しかし、連隊とはいっても小規模で、1920年の初めの時点で300から400人の隊

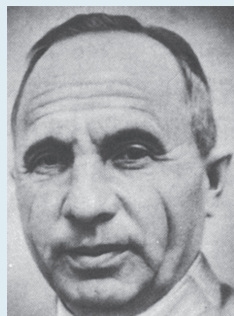
キーは、ロシアのケレンスキー政権でペトログラード（現サンクトペテルブルグ）の軍政官であったピンハス・ルーテンベルク（1879～1942）と共に、ハ



ピンハス・ルーテンベルク

ガナを創設したのである（後年ルーテンベルクは、ヤルムクとヨルダンの両河川を利用した水力発電所をつくり、パレスチナ電力公社々長となり、テルアヴィヴ港建設、パレスチナ航空の創設など実業家として活躍した）。ジャボチンスキーは、軍法会議にかけられ、私兵の組織化と武器の不法所持で、15年の実刑判決を言い渡されたが、高等弁務官の着任による特赦で、7月8日に釈放された。ジャボチンスキーはそれでも納得せずに抗議を続け、結局在エジプト英軍司令官は1921年3月にこの判決を取り消した。

その後ジャボチンスキーは、世界シオニスト機構の執行部メンバーとなった。ハガナを組織的に育てたのは、ユダヤ軍団の隊員であったエリヤフ・ゴロン



エリヤフ・ゴロン

ブ（1893～1945）である。ヒスタドルートの創設当初、この労働総同盟の中核的存在が、ポアレ・ツィオンの組織アフダット・ハアボダー（統一シオニスト労働党）で、この党は結成から1年4か月経った1920年7月、キネレットで党大会を開き、「ユダヤ人の生命財産そして名誉をアラブの攻撃から守る」ことを目的に、ハガナを正式に発足させた。

ヒスタドルートは5か月後の12月に誕生し、ハガナは労働総同盟の防衛委員会に引継がれ、ゴロンブが責任者として活動した。

ハガナに反対するハシヨメル派

ハガナは独立闘争で大きい役割を果たすことになるが、この組織に従わない者がいた。1909年に第2アリヤの人々がつくった自警団ハシヨメルである。ハシヨメルは、第一次世界大戦時、トルコ軍のなかにユダヤ軍団をつくろうと考えた。トルコ当局はその構想を受け入れなかったが、ハシヨメルは親トルコ傾向を維持した。つまり、ハシヨメルは負け犬の側について、ユダヤ人社会の発展と自衛を考えていたのである。ユダヤ人社会のことを考える点では同じであっても、第一次世界大戦時正反対の世界にいた人々が、急に仲良くな



ヤコブ・ドーリ

れるわけがない。ハガナの幹部にはジュディアン連隊の隊員であった人が沢山いたし、イスラエル国防軍の初代参謀総長となったヤコブ・ドーリ（1889～1973）も連隊出身で、ハガナではゴロンブにつぐ地位にあった。ハシヨメルの人々はハガナの統制に服さず、武器を引き渡さなかった（武器の引き渡しに応じたのは、1929年のアラブの暴動後であった）。

ユダヤ民族のナショナルホーム建設を認めた国際連盟

1922年7月22日、国際連盟最高会議は、パレスチナ委任統治令（The Mandate for Palestine, The Council of the League of Nations）を発表した。28か条より成るこの委任統治令は、ユダヤ民族のナショナルホーム建設を、国際社会が公式に認めたものとして知られる。統治令は前文で、以前トルコ帝国に属していたパレスチナを委任統治下におくとしたうえで、次のように国際連盟の立場を明らかにした。

「…1917年11月2日、大英帝国は

…パレスチナにおけるユダヤ民族のためのナショナルホーム建設に賛成する旨の宣言を発し、主要連合諸国はその宣言を採択し、委任統治がその宣言の顕現に責任を有することを認める。

主要連合諸国は、ユダヤ民族とパレスチナとの歴史的結びつきと、その地におけるナショナルホーム再建を認め

たうえで、大英帝国をパレスチナ委任統治国として選んだ…」。

その条文には、次のように明記してある。すなわち、第2条「委任統治は、この地域をユダヤ民族のナショナルホーム建設を確実にする、政治、行政及び経済条件下におく責任がある」。

第4条「ユダヤ民族のナショナルホーム建設と、パレスチナのユダヤ人社会の權益に影響する経済、社会その他の課題上、パレスチナ行政府に助言し協力する公的組織として、適切なユダヤ機関の存在を認める…」。

第6条「パレスチナ行政府は、ほかの社会の地位と権利を守りつつ、適当な条件下でユダヤ人移住を促進し、第4条で触れたユダヤ機関と協力し、公有地、公共目的に必要なとしない荒地（無人地）を含む土地に、ユダヤ人による密集した入植地建設を奨励する」。

このように、バルフォア宣言は、日本を含む国際社会から認知され、大英帝国はユダヤ民族のナショナルホーム建設の推進と抱き合わせで、委任統治権を認められたのである。

